

子ども学のはじまり

津守 真

思いがけないときに、子どもに背中をたかれたり、声をかけられて、そこから、子どもの世界にひきこまれ、子どもと私の間に新しい世界が開かれて、子どもの世界が私の前にあらわれてくることを、私はしばしば経験してきた。

その日は、久しぶりで幼稚園の子どもたちところに行くので、数日前から、この次にいくときにはどんな態度でいったらいいのか、不安を感じていた。そのときの未来は、不安の色彩をもったまま継続していた。砂場に出てもその状態はつづいていて、私はどこに位置してよいかわからなかった。じきに、Aが私の後から背中をどんと押した。思っていなかったときに、私はいなかったほど強く押されて、私は驚

き、Aの笑顔とともに、この瞬間に、それまでとは異質な時間がはじまったことに、そのとき、自分自身で気が付いた。

考えてみると、私が子どもからいろいろのことを学ぶのは、いつもこうして始まっている。こういうことを見たいと思っただもの中にはいることはあるけれども、たいがい、それは違う別のことを、それも、はるかに面白いことを見せよう。

これは、私だけのことではないようで、子どもに接する人は、多かれ少なかれ、同様の経験をもっていると考えてよいようである。子どもと遊ぶときに、ふだんとは違う安らぎを感じる人は多くいる。雨の日など、思うようにいかなくて、大き過ぎた後に、気がついてみると、子どもたちがそ

れぞれに自分の遊びをみつめて、落ち着いた活気のある生活になっていることもある。これこそは、うまくいくだろうと思っただけの材料が、見むきもされないで、全く違ったことがはじまることもある。おとなが考えているのとは異質な子どもの世界があることを、おとなはあるとき経験させられるのである。

子どもの世界の中にひきこまれるとき、そこでは、ひとつひとつのできごとが、おとなを直接に、そのことに結びつける。その世界は、対象として観念の中にある。輪廓をもって固定した世界とは異なる。人が実感をもって子どもとふれる各瞬間は、ひとつひとつが自分自身と直接結びつく独立した瞬間である。ついつい面白くてひきずりこまれる瞬間でもあり、子どもの世界が口をあけている場所でもある。

子ども学がはじまるもうひとつの条件が

ある。それは、子どもとゆっくりと相手をする覚悟をもって、子どもの中にはいることである。自分でも、腰が落ち着かないことがあるので、こんなことをいうのは気恥ずかしいことであるけれども、そういうときには、子どものほんとうの姿が見えてこないし、楽しさが湧いてこないのです。このことは、自分自身にも言いきかせておかなければならない。他の子どもからよばれたり、やむを得ない用事ができて立ち去るときには、子どもにもそのことは了解させているときには、子どもも本心を見せてくれない。やむを得ないときのほかは、自分からは立ち去らないつもりでそこにいると、面白いことが次々に起って、いつのまにか時間を過してしまふ。こういうことも、数限りなくある。

「おじちゃん、おにごっこしよう」とや

つてくる子どもたち数人とおにごっこをしたときのことである。だれがおになのかと思っていると、最初から私がおにときまわっているみたいである。「高いところに止ればつかまらないんだもん」と、みんな、ベランダの上の上りきりである。私だけが下にいて、おにである。「つかまえるぞ、おにだぞ、たべちゃうぞ」と言って、一しよにけらけら笑っていればそれでおもしろい。ときどき、追いかけて走りまわるところはおにごっこだが、あとは、一しよにたのしくいることが、そこでのすべてである。その時間は、ずい分長い。かぞえてみれば、四十分以上もたっている。けれども、一しよにたのしくいる時間はみじかく感ぜられる。気がついたときには、もう帰りの時間になっている。こういうときの子どもたちの世界には、前も後もないみたいだ。その瞬間のたのしさがあるだけのようである。瞬間と言っても、長い瞬間であるが。

その中にいるとき、おとなも、その時の前後を忘れる。子どもたちの世界って広いなあとと思う。

私は、おにごっこをしていたのではなかったのだと思う。子どもと一しよに、ともにいる世界をたのしんでいたのだと思う。帰りの時間になって、私も帰ろうとして、いと、砂場のところで、男の子がきて、エプロンのポケットの中から小さな石をとり出し、「どうめいな石をみせてあげようか」と言って、そっと見せてくれる。白い石ばかりポケットの中に入れていた。のぞこうとすると「見ちゃだめ」と言って、ポケットを手でおさえる。帰り際のおまけに見せてくれる子どもたちの世界がここにもある。

子どもと一しよにたのしむ時間は、乳児の早い時期からある。子どもが笑いはじめたころ、子どもの笑いにこたえてこちらも笑うと、また子どもが笑う。顔をノートで

かくして、目だけ見えただけで、けらけら笑って喜ぶ時期もある。こういう遊びを繰返している、際限なくつづくように思えてくる。こちらはあきて、やめないでつづけていると、笑い合というよりも、それをこえて、共にいる存在感というようなものを感じるようになる。子どもにさそわれて、一しよに何かをやるときには、いつもこれに似た経験をする。同じ本を何度もくり返して読むとき、あるいはまた、箱を出してくれと言われて、ありたけの箱を次々に出して並べるとき等々、際限なくつづくかのように思われるが、あるところまでゆくと、子どもは自分からやめて、ふっと立ち去り、自分の遊びを見つけて、遊びはじめる。そういうときの子どもの遊びは、本格的にとりくむ、創造的、かつ、想像的な遊びである。そこには子どもの本心があるからさまにあらわれる。そこではもはや、おとなが手を出す必要はなく、遊びの中に

子どもの心の姿を見て、たのしんでいられる。さまざまにくりひろげられる、こういうときの遊びは、実に興味がつきない。

もちろん、おとなは、いつもそのすべてにつきあうわけにはいかない。いそがしいことが次々に出てくるのがおとなの生活である。だが、幼児のときのこのおもしろい遊びの傍にいられるときは、幸いな時である。自らいそがしくして立ち去る愚はしない方がよい。こうしていると、また子どもがさそってくれて、面白さが加わるときもある。

こうして、いつのまにか夜になって、子どもたちが眠ってしまったあと、床の上に散らかったものにまじって落ちていた紙片を拾い上げると、その裏に、線がきのうずまきや波線、いろいろなものが描かれている。よくよくながめると、昼間の遊びがうふつとしてくる。それは子どもの生活の中の心の軌跡である。子どもの描画は、お

となの手をへない、子ども自身の残したままの記録である。これは、私自身の研究の原点になっている。

子どもがくりひろげて見せてくれる、こうしたさまざまの遊びの姿から、その奥にある子どもの世界のことを考えるのは、子ども学の最もたのしい部分である。そのときには、子どもの世界は、おとなである私自身の世界と異質なものではなく、おとな自身の心の中にもある。何か共通なものを探求する作業になっている。子どものことを考えることは、自分の心をひろげることにもなっている。

知恵おくれの幼児のように、ことばを使うことをせず、触覚や運動感覚、臭覚のよくな原始的な感覚に多く頼っていると思われる子どもと遊ぶときには、人間の最も原始的な心の状態にふれるように思う。洋服を脱ぎ、パンツまでぬいでとびはねる子ども

も、——無理にはかせようとすれば、かみつかれるほどいやがることもある。おもちゃ箱を全部ひっくりかえして、その中からたったひとつのものを探し出してあそびはじめると、——あつというまもなく、おもちゃ箱を全部ひっくりかえている。白いごはん、白い豆腐、卵の白みなど、白いものしか食べない子ども——無理にたべさせようとすれば、口の中から出してしまふ。そんなにまで、あることに執着し、欲し、いやがるのは、何かその子にとってだじじなことがあるのだらうと思う。知恵のおくれた子どもを、外につれてゆくとき、恥ずかしい思いをしないように、特別に口やかましくなり、社会の基準に合うように、子どもへの要求が多くなる母親を見ると、とき、そしてだれに会っても、要請のみ多く、自分のできることを一しよに喜んでつき会ってくれるひとの少ないこの子どもが、外向きの衣服をすべて投げ捨てようとする

する気持もわかるような気がする。この子ども、ゆっくりと楽しんでつき合っているうちに、衣服に対する意味が次第にかわってくるのを見ることが出来る。一見、奇異に見える行動が、人間の最も奥深い心の痛みであらわれであったり、おとなだったら文学や哲学で表現するだらうような心の動きの、この子どものレベルでの具体的な表現であったりする。

クラス担任だったなら、もっといろいろのことがわかって面白いだらう。母親だったなら、もっと親身になって、生活全体についてわかるだらう。子どもを育てる立場になったなら、長期にわたって、その生活の内実に分れるのであるから、その資料には重みがある。そういう資料にもとづいた子ども学が、これから、もっと実ってゆることが望まれる。それでは、そのいずれでもない立場の者が子ども学をするのは、ど

ういうことになるだらうか。子どもの心は奥深いものであつて、人によって、見せる側面を異にする。どの人も、子どもの人生の途上のあるところで、ある側面にふれるに過ぎない。だれも子どもの生活のすべてを知ることはできない。心を開いて、ゆっくりと子どもと交わるとき、その人と、子どもは存在をわかち合うのであると思ふ。一回限りの出会い、定期的にくり返される出会い、人により、子どもにより、さまざまである。子どもが自分らしく十分に生きられるような生活をつくるのに役立つことができるときは幸いであるし、そのようなところに、観察者としてであつても、立ち会うことができるときには、心が躍る思いがする。それがどんな立場であらうと、子どもの生きた生活にふれる体験があつて、その意味を考えるとところに子ども学があつて、その内容はさまざまに豊富であつて、つきることのない興味を蔵している。

いま、新年号のことを書いておるとき、幼稚園のスピーカーから運動会の音楽に合わせて、先生が整列させる声や手拍子が鳴りひびいている。小さな子どもたちが、赤や黄の帽子をかぶり、列を作つて歩く。このときには、先生はいつもの先生ではなく、遊戯のお手本であり子ども達の注意をひくとつにむけさせるリーダーである。皆で遊戯をし、かけっこをし、順序よく並んで入退場し、それ以外の生活は認められないかのようにある。帰るときには大声を出して元気な子どもをみると、これでよさそうに思う人も多いだろう。しかし、幼稚園から家に帰つたとき、たくさんの子どもが、ふだんよりぐったりして、怒りっぽく、いらだちており、夜もねつきが悪かつたりする。どうして、幼稚園のときから、こんな運動会をしなければいけないのだろうか。大きくなった子どもたちは、運動会の練習のとき、いかに納得いかずに怒られたか、

その思い出もこもも語る。そのときにまともなことを考へなくさせるのが運動会のことである。幼稚園百年の歴史の中で、運動会はいつはじまり、どのように推移してきたのだろうか。百年たつて、良い方に向つているようにも思われない。

近所の高等学校では、太鼓の音、応援のかけ声勇ましく、別の運動会をしている。チームの統制がとれて、リーダーが張り切るほど、それに乗れなくて傷つく者も多い。運動会を立派にやりとげようとするほど、子どもの生活は失われてゆくように思われる。

本年は、明治九年に東京女子師範学校に付属幼稚園が創設されて百年を迎える。本誌も、明治三十四年に創刊されて、七十五巻を迎える。子どもが喜んで生活している幼稚園が一つでも増えることを祈る。

(津守 真)

幼児の教育 第七十五巻第一号

一月号 © 定価二〇〇円

昭和五十年十二月二十五日印刷

昭和五十一年一月一日発行

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 津 守 真
発行者

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

108 東京都港区三田五ノ一二ノ一

印刷所 図書印刷株式会社

101 東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所 フレーベル館にお願いいたします